

# 淡路いぶし瓦

栄和瓦産業代表取締役・浜口健一さん

## 渋くつやめく銀色の光沢

独特の風情が目を引く淡路のいぶし瓦。

だが今、瓦産業は長期的な需要の低落に苦しんでいる。

淡路瓦を守り、挑戦を続ける企業に迫る。

### 飛鳥時代から続く瓦づくり

♪<sup>いらか</sup>薨の波と雲の波♪～。

ご存じ小学唱歌の「鯉のぼり」(作詞者不詳)の最初の一節である。誰でも一度や二度は口ずさんだことがあると思うが、「薨」とは何かを知らずに歌っていた人もいたのではないだろうか。薨とは、瓦のことである。屋根の瓦がまるで波のように見える様子をこう表現したのだろう。

東京にいと、瓦屋根を見るのがめっきり少なくなった。都心はもとより、郊外の住宅街でも目立つのはスレート屋根などで、瓦屋根は明らかに少数派である。

「瓦の出荷量のピークは1995年の阪神淡路大震災の前後です。それ以後は毎年10%くらいずつ減っていき、現在はピーク時の20分の1くらいしかありません」

栄和瓦産業社長の浜口健一さんがそう言う。

日本での瓦の生産はおおよそ1400

年前の飛鳥時代に始まったとされる。その数百年後には、栄和瓦産業のある兵庫県の淡路島でも瓦づくりが始まったという。

瓦の産地は全国にある。その中で淡路瓦が三州瓦(愛知)、石州瓦(島根)とともに瓦の三大産地と称されるようになった理由の1つは、地の利のよさにあった。

淡路島は古くから四国と本州を結ぶ交通の要衝として栄えていた。港が整備され、海路で商都・大阪に荷物を運ぶのにも便利であった。そして大阪の背後には瓦を大量に使う寺社建築が林立する京都、奈良が控えていた。

もう1つ、淡路が瓦の産地として発展した大きな理由は、土にあった。淡路で産出する「なめ土」と呼ばれる粘土は可塑性がよく、収縮率が低い特性がある。そのため精度の高い成形がしやすい。炭素や鉄分などの配合もよく、淡路独特のいぶし瓦をつくるのにうってつけでもあった。

### 淡路独特のいぶし瓦

瓦は、まず粘土と土を混ぜ、水分を加えてから成形し、いったん乾燥させてから焼成するという工程を経てつくられる。成形した後の乾燥は短くても3日、鬼瓦のような肉厚のものの場合には1カ月かけることもある。

「内部に水分が残っていると、焼いたときに割れてしまうので、ゆっくり時間をかけて乾燥させる必要があります」

乾燥させた瓦は窯に入れて焼く。栄和瓦産業には一度に4,000枚の瓦が焼ける窯が10基ある。焼成温度は最高で1,000度。三大産地の瓦の中で焼成温度が最も低いという。これも土の持つ特性に合わせたものだ。

今はコンピュータで温度を管理しているが、瓦を窯から取り出すのに窯内を400度まで下げるには丸1日かかる。したがって10基の窯すべてに4,000枚の瓦を入れても焼成に1日、





練られた原土が瓦の形に整えられ、乾燥の工程へ進んでいく。



はまぐち・けんいち(右から4人目) 1972年、兵庫県生まれ。大阪工業大学卒業後、栄和瓦産業に入社。営業や経理、製造まで幅広い仕事をこなしてきた。36歳のとき、同社社長に就任。「新しいことにチャレンジするのが好き」で、銀色のいぶし瓦を黒くした「黒いぶし瓦」の開発や、レンガメーカーとコラボした「黒いぶしレンガ」の製造も手がける。子供のころから野球に取り組み、現在もマスターズ甲子園に出場中。もちろん鼯は阪神タイガース。  
※撮影時のみマスクを外しました





(左上) 練られた後の原土。とてもきめが細かい。(右上) 帯のように長い瓦は寸法に合わせてカットされる。柔らかそうに見えるが、見た目よりは硬い。(左下) 本葺用5分軒巴瓦。型をプレスした後、金へらなどで磨く。(右下) 4,000枚の瓦を焼き上げる窯。

冷却に1日かけ、計2日でできる瓦は4万枚。1日あたりだと2万枚ということになる。

いぶし瓦の場合は、一度焼き上がった後に煙でいぶすという工程が加わる。このとき焼成窯にはガスだけを入れ、空気が入らないようにする。そうすることで窯内が不完全燃焼の状態になり、瓦の表面に煤が付く。この煤は炭素の薄い膜で、冷えてから煤を落とすと淡路瓦独特の光沢のある銀色になるのである。

「昔は焼くときに火力の強い松の木を燃料にしていました。いぶすときには松の葉も入れていたそうです。松の葉を燃やしながら水をかけることで、不完全燃焼させていたのです。しかし、戦後から高度経済成長期にかけて住宅の建設ラッシュが続くと、松の木では製造が間に合わなくなってしまう、ガス窯を使うようになりました」

## 売上の3～4割は輸出

栄和瓦産業の創業は1978年。すでにガス窯が普及していて、同社も創業当初からガス窯を使っていた。

400年以上の歴史を持つ淡路瓦の産地として、同社は後発といえる。浜口さんの父親が創業したのだが、後発を承知でなぜ創業したのか。その理由を浜口さんはこう説明する。「当時、瓦産業は売り上げも収益もとてもよかったのです。瓦を出荷するときに船に積み込むアルバイトのお給料でさえ、ずいぶんよかったと聞いています。言わば成長産業だったのです」

瓦づくりと聞くと、手作業が多いイメージを思い浮かべるかもしれませんが、栄和瓦産業は25年ほど前か

らオートメーション化を導入している。粘土がベルトコンベヤーで運ばれ、プレス機で次々に成形されていく。もちろん鬼瓦など細かい加工が必要なものは手作業の工程も多いが、基本はオートメーションだ。

現在、淡路の瓦工業組合に加盟しているのは65社。そのうち約10社は販売会社だが、製造会社でもフル稼働しているところはほとんどないという。そんな中で浜口さんの会社は連日フル稼働だ。

「輸出をしているのが大きいですね。うちの売上の3～4割は輸出です」

と言う浜口さんによれば、輸出先は韓国、中国、台湾、フィリピン、さらにカナダ、欧州など幅広い。

「今はカナダのお寺から受注した高さ2.7メートルの鬼瓦を2つ、つくっているところです。中は空洞にして、そこに鉄骨を入れて補強しています。フィリピンでは金属屋根だと雨が降





鹿児島県指宿市『薩摩伝承館』

「瓦屋根を葺く職人が少なくなるなら、作業をできるだけ簡略化すればいいんです。瓦を固定する職人技も、接着剤を使えば誰でも固定できる。職人は減っていくかもしれませんが、限界はまったくくないですね」と浜口さん。

ったときの音がすごいで、富裕層には住宅の屋根を瓦にしたいという人が多いそうです。向こうは住宅工事費の15%くらいを屋根に充てるといいです」

国内市場が縮小する一方で、輸出に活路を見出す浜口さん。「この環境下でも生産を落とさずこれでしたが、淡路瓦の輸出の94%を当社が占めていることが残念です」と産地の活性が進まないことを危惧する。

## 甍の波は日本の原風景

淡路でも瓦製造に見切りをつける会社もある。浜口さんはそうした会社から金型やプレス機などを買い取っている。そうして集めた金型はすでに100台近くになるそうだ。

「鬼瓦だけつくるとか飾り瓦だけつくるとか、淡路の瓦産業は昔から分業構造になっていました。そうして

全部で4,000種類くらいの瓦をつくっていた時代もあります。だから廃業する会社が出てくると、そこがつくっていた瓦はほかではつくれないということになりかねません。その瓦の注文が来たとき、全国に名を馳せた産地が『それはつくれません』とは言えません。淡路でつくれないものがあってはいけないんです」

この間、浜口さんは瓦づくりだけではなく、施工にも取り組んできた。瓦屋根の施工ができる職人が少なくなってきたことに対応し、熟練した職人でなくても施工ができる、接着剤を使う工法も開発した。

「接着工法を取り入れたのは20年くらい前のことですが、当時は日を目を見ず、注目されるようになったの

はこの5年くらいの話です」

阪神淡路大震災以降、瓦の需要が急減してきたのは、震災のときに多くの住宅の瓦が落下したことが一因だとも言われる。地震に弱い、というイメージができてしまったのだ。しかし瓦業界ではその後、耐震性を強化するために釘で固定する工法を開発した。浜口さんが開発した接着工法も耐震には有効だ。「瓦屋根は値段が高い」というイメージもあるが、耐久性に優れた瓦は100年以上もつとされる。長期的なランニングコストで見れば瓦は決して高くない、というのが業界の主張だ。

「先行きは厳しいですよ。でも、甍の波は日本の原風景のようなもの。淡路瓦は何としても存続させたい。そのためにはこれからも新しいことにどんどんチャレンジしていきます」

どこまでもポジティブな浜口さんは、きっぱりとそう言い切った。